

ニホンザルで謎の出血症

Japanese monkey deaths puzzle

DAVID CYRANOSKI 2010年7月15日号 Vol. 466 (302-303)

www.nature.com/news/2010/100713/full/466302a.html

京大霊長類研究所のニホンザルに未知の出血症が流行した。
しかし、人間への脅威とはならないと、関係者は主張している。

京都大学霊長類研究所（愛知県犬山市）で、ニホンザルに謎の出血症が流行し、大量死をまねいている。関係者らは、これはニホンザルに限定され、人間への脅威にはならないとして、世間を安心させようと腐心している。研究所は、7月1日付の『霊長類研究』（日本語）のオンライン版（*Primate Res.* 26, 69–71; 2010）と7月7日のプレスリリースで、この疾患について説明し、まだ原因が解明できていないことを明らかにした。しかし、外部の研究者らは、これらの説明では不十分だとし、さらに詳細な情報を求めている。

この疾患が最初にみられたのは2001年7月だった。その後2002年7月までに、7頭のニホンザル（*Macaca fuscata*）が発症し、6頭が死亡した。研究所ではこの疾患に「出血症」という仮称を付けた。臨床所見は、食欲低下、横臥、顔面蒼白、鼻粘膜からの出血などで、死体解剖では肺や腸管に出血が認められた。遺伝子検査や細菌および毒物の検査を行ったが原因は突き止められず、やがて流行は自然終息し、研究所は平常に戻った。ところが、2008年3月に再発生し、2010年4月までに、39頭のニホンザルが発症した。うち25頭が死亡し、13頭は安楽死処分を施した。2回の流行で生き残ったのはそれぞれ1頭のみである。

今回公表されたデータは、2回目の発症の後に霊長類研究所内に設置された疾病対策委員会によるものである。委員会は、発症したサルから血液、糞便、組織を採取し、6種の細菌と16種のウイル

スについてPCR解析などの検査を行った。しかし、死因を説明できる結果は得られなかった。ヤーキス国立霊長類研究所（米国ジョージア州アトランタ）の所長 François Villinger は、日本の研究所は優れた診断能力を備えている場合が多いと話す。「ですから、この疾患が出血症などの既知の病原体によるものでない可能性が高いという話を信頼しています」。

霊長類研究所所長の松沢哲郎^{まつざわてつろう}は、この出血症がヒトやほかの動物に広まる可能性があるとする地元マスコミの報道を声高に否定している。彼は7月7日の記者会見で、研究所のほかの霊長類種で発症したものはいないことを強調した。研究所には現在、ニホンザルのほか、チンパンジーやマーモセット、カニクイザルなど13種、1200頭以上が飼育されている。サルを扱う人間にも症状はいつい現れていない。「マスメディアでのこうした報道は適切ではありません。この出血症は、ニホンザルという種に特異的な病原体によって生じると考えています」と彼は話す。

松沢によれば、霊長類研究所が出血症に関する情報を迅速に公表しなかったのは、公表によりさらに多くの人々にパニックを引き起こすおそれがあったからだという。発症はまだ続いているが、消毒薬の使用と体調不良のサルを隔離することでペースは鈍っている（5月に1例、6月に1例）。松沢は、今後の調査結果の公表に備え、一部のデータの発表を差し控えている。Nature は、環境面で考え



られる原因を探っているのか、どの細菌やウイルスを検査対象にしたのか、生き残った2頭のサルの解析で何が明らかになったのかを尋ねたが、回答はなかった。

松沢は、残りの790頭のニホンザルを対象に、ほかのウイルスや細菌についてスクリーニングや遺伝子検査を行って、原因を突き止め、早期診断の検査法を確立したいと考えている。彼は現在、協力者を探しているところであり、Nature を通じてこの出血を知った動物病原体研究者がさらに興味をもつことを期待している。霊長類疾患の専門家であるジョージア大学（米国アセンズ）の Sonia Altizer は、これらのニホンザルの中に最近野生で捕獲されたものがいるのかどうか、どこでこの疾患にかかった可能性があるのか、また、サルたちは単独飼育と集団飼育のどちらだったのか、といった疑問を口にした。「動物どうしが接触した可能性や、病態と死亡の時系列パターンがわかれば、これが本当に感染症なのかははっきりし、可能性のある感染ルートの究明にも役立つでしょう」と彼女は話す。

Altizer はまた、出血症流行の前に、サルとヒトの間の感染症病原体の伝播を最小限にするために霊長類研究所がとっていた方策を知りたがっている。「おそらく、細心の措置が随所で取られ、そのおかげで、ヒトが汚染物質もしくは病原体にさらされる確率が低く抑えられていたのだと思います。ですから、ヒトがこの疾患にかからないと断言するには、まだ早すぎる気がします」と彼女は語っている。

（翻訳：船田晶子）